

# 第7回地域活動報告会 実 施 報 告 書

稚内北星学園大学  
*Wakkanai Hokusei Gakuen University*



## 目 次

---

ごあいさつ	稚内北星学園大学 副学長 佐賀 孝博	・・・	1
1. 地域活動報告会概要（講演録）	・・・・・・・・・・・・・・・・		3
2. ポスター報告（報告資料）	・・・・・・・・・・・・・・・・		19
3. アンケート集計結果	・・・・・・・・・・・・・・・・		22
資 料	・・・・・・・・・・・・・・・・		32



稚内北星学園大学副学長

事業推進責任者 佐 賀 孝 博

本学は26年度の文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に選定され、「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」というタイトルの下、全学的に地域連携活動に取り組んできました。その柱は次の3つです。

- ① 地域の教育力向上
- ② 観光まちづくり
- ③ 中心市街地活性化

今回の地域活動報告会では、この3つの柱それぞれに関連した取り組みについて活動を行なった教員及び学生より計3件の口頭報告がありました。報告内容については報告会出席者の方々による事後アンケートで好意的なコメントが多数寄せられました。

また、今回の地域活動報告会は、

本報告会では、実行委員に多くの学生が加わり計画段階から参画し当日も司会進行を担当するなど重要な役割をしっかりと果たしてくれました。これら学生の発表や運営をする姿を見て、大学COC事業の目的である「（学生が）大学での学びを通して地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材を育成する」ことが着実に進んでいることを実感しております。ただ、この学生の活躍を1月に急逝された手島孝通COCプログラムオフィサーとともに見るができなかったことが大変残念でした。学生の成長を最も期待し実感されていた手島先生のこれまでのご活躍に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたします。

本学は大学COC事業を通して、これまで以上に学生・教員が地域を見据えた活動を行ない、地域活性化の一助になるように今後も活動を行なっていきます。学内外の多くの方々から引き続きご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 1. 地域活動報告会概要（講演録）

---

地域活動報告会も今回で第7回を数える。COC推進委員会では、具体的な実施計画の草案を10月4日に決定し、同月24日に実施計画を正式決定した。その後、教授会への報告、委員会での審議を重ね、実施に至ったものである。

主 催：稚内北星学園大学

会 場：新館 1301 教室

日 時：平成29年 11月21日（火）14時30分～16時10分

発表形式

口頭発表及びポスター発表形式とする。

第7回地域活動報告会実行委員会

Giri Sujata・石尾美岬・中村優菜・旭拓海・鵜田優太・袴田健斗・吉野俊平・梶浦里沙・勝又万由子・佐藤佑介・中島拓人・三石美保・山岸純樹・吉岡大輔・Krishna Prasad Bhattarai（以上、学生委員）・石黒志津・鏡山樹・石橋豊之・中川圭太・三浦猛・向光宏・若原幸範（実行委員長）

## 第7回地域活動報告会

口頭報告 会場：稚内北星学園大学 新館 1301 教室

---

### 第1報告（地域教育支援室）

14:35～14:55

#### ○ 報 告 者

澁谷 久(情報メディア学部 教授)

石尾 美岬(情報メディア学部 2 年)

中村 優菜(情報メディア学部 2 年)

#### ○ 報 告 題 名

数学を学ぶ楽しさと教える楽しさがあるマスフェアの取り組み

#### ○ 報告内容要旨

「マス・フェア」は数学の実験を参加者に演示したり、体験させる取り組みで、そのねらいは、数学を学習する楽しさや数学のよさを感じさせることである。本学の学生がデモンストレーターとしての豊富町立豊富中学校、礼文町立香深中学校での実践の様子を伝えるとともに、地域の教育力向上にかかわる学生の数学の指導に対する自信や、新しい時代に必要となる資質・能力の1つである中学生に対する学びに向かう力の育成を観点に発表する。

### 第2報告（まちなか振興支援室）

15:00～15:20

#### ○ 報 告 者

若原 幸範(情報メディア学部 准教授)

旭 拓海, 鴫田 優太, 袴田 健斗, 吉野 俊平 (情報メディア学部 2 年)

梶浦 里沙, 勝又 万由子, 佐藤 佑介, 中島 拓人,

三石 美保, 山岸 純樹, 吉岡 大輔 (情報メディア学部 3 年)

#### ○ 報 告 題 名

平成 29 年度まちなか調査実習中間報告

～稚内中央商店街アクションリサーチ/稚内市子どもの貧困問題関連調査～

#### ○ 報告内容要旨

今年度のまちなか振興支援室の事業として、2つのテーマで調査実習を行っています。第1に、稚内中央商店街におけるアクションリサーチです。Facebook による商店街の情報発信や商店街 MAP 作成を学生が行い、その活動を通して商店街に実態と再生の方向性を探ることを目指しています。第2に、稚内市における子どもの貧困問題に関する調査です。稚内における子どもたちの困難状況や育ちのプロセス、また子ども・家庭への支援の総体を明らかにし、可視化することを目指しています。



## ○ 報 告 者

Bishnu Prasad Gautam(情報メディア学部 教授)

Krishna Prasad Bhattarai(情報メディア学部 4年)

Bhagawan Rokaha(情報メディア学部 研究生)

## ○ 報 告 題 名

Potential and Enhancement of Cultural Tourism thereby Integrating IoT(Internet of Old Things) – A Case Study of Aamako Janto –

## ○ 報告内容要旨

Cultural or heritage tourism has been emerged as a new concern for tourism industry. In fact, this has been a key concern for the regions where indigenous practices provide invaluable knowledge for sustainable living. However, in the modern day of technological advancement, this kind of heritage significance and knowledge behind it would sometimes overshadowed due to various reasons.

In this study, we would highlight indigenous knowledge by developing and enhancing an impactful tool or a machine (Stone Mill) that our ancestors invented and has been useful for our living ever since. We called this machine Aamako Janto. Particularly, we modified it and made it IoT enabled. Furthermore, we would like to connect this device with other ancient devices through internet and create a new kind of web which we call IoT (The Internet of Old Things). Finally, we would like to recommend how our endeavor can enhance and promote the cultural tourism thereby integrating ancient tools by IoT.

○司会 皆様、本日はお忙しい中、稚内北星学園大学COC第7回地域活動報告会にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。

定刻となりましたので、始めさせていただきます。

私は、本日、司会を担当しています稚内北星学園大学情報メディア学部、情報メディア学科4年のギリ・スザタです。不慣れではありますが、本日はよろしくお願いします。

まず、皆様に御確認がございまして、この会の様子は、録画、録音、または会場内を写真撮影して報告書の作成などのために使用することになっております。この点につきまして、会場内の皆様の御了解をいただきたいと思っております。よろしくお願いします。

初めに、本学のCOCの事業推進代表者である齊藤学長より御挨拶申し上げます。

○齊藤学長 こんにちは。本学のCOC事業は、26年度から始まりまして、5年間の事業期間が終了するまで、残すところあと1年半ほどとなりました。この地域活動報告会も7回目となります。

きょうはそれぞれの支援室、三つの支援室がありますけれども、そこから一つずつの報告と、それからポスター発表が二つ用意されております。

そもそもこの報告会というのは、地域の中で主に学生が活躍したことを紹介して、共有いたしまして、地域の方々に励ましていただくという趣旨のもとで行われるものですので、忌憚のない御意見をと言うよりは、愛情のある励ましのお言葉をいただけたら幸いです。

本日は、京都文教大学からもお客様がいらして、ありがとうございます。きょうお集まりいただいている方、それから日ごろ本学及び本学の学生に御協力いただいている皆様に感謝を申し上げまして、御挨拶いたします。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

今回の報告会の報告は、口頭発表とポスター発表となっております。ポスター発表は学会等で用いられる発表方法ですが、なじみのない方もいらっしゃると思います。簡単に言いますと、参加者と報告者がポスターに書かれた研究内容を時間をかけて検討する報告形式のことを言います。

それでは、これから口頭発表を三つ行います。

報告は、報告20分と、質問の時間は5分となっております。

## 口頭報告

### 第1報告（地域教育支援室）

○司会 第1報告は、本学情報メディア学部教授の渋谷先生と学生2名が数学を学ぶ大切さと教える大切さがある「マス・フェア」の取り組みについて報告いたします。

では、お願いします。

○中村氏 これから、地域活動報告会「マス・フェア」実施報告を始めたいと思います。

情報メディア学部情報メディア学科数学教育コースの中村優菜です。

○石尾氏 同じく、石尾美岬です。

○渋谷氏 渋谷です。よろしくお願いします。

○中村氏 私たちは、この目次に沿って内容を報告していきたいと思っています。

まず、「マス・フェア」とはです。マスとは数学という意味で、フェアとは市場という意味になっています。この「マス・フェア」は、実際のお祭りのような出店形式で、実際に数学の実験や体験活動を通し



て数学を学ぶ、数学の楽しさを知るというものとなっています。

目的は、学生側としては、数学の楽しさを教えるという点と、実際に生徒と触れ合いながら教えるというところ です。

本学の数学教育コースの学生は、数学の教員免許の取得を目指している学生が多いので、そういった点から、実際に生徒と触れ合いながら数学の楽しさを教えるという目的になっています。生徒側としては、数学の学習する楽しさ、よさを知るという点と、実際に触れ合って数学に親しみを持ってもらおうという目的になっています。

地域貢献という点では、本学の学生は、先ほど言ったとおり、教員免許の取得を目指しているので、実際に生徒と触れ合って数学を教える環境を必要として、実際に教えていきたいと思っています。そういう考えの生徒は、学力を上げたいと思っている生徒がいたり、実際にもっと数学について知りたいという学生が多いのではないかと考えています。双方の考えから、数学を知るきっかけをつくるまでの学び合いを地域貢献として行える例はないかと思っています。実際に稚内市内では、数学教室やぶんぶん塾といった活動はあるのですが、市街に出たときに数学活動というのは余りする機会もないし、つくる場所も難しいので、今回講義の中で、稚内北星学園大学と協定を結んでいる豊富町の中学校で実際に行うことで地域貢献をしているのではないかと考えました。

実施内容としては、ことしの7月14日に豊富中学校で中学校3年生を対象として行いました。今回、この活動には学生6人が参加して、各2ブース担当をしました。そして、それをパビリオン方式といって、パビリオン方式で1ブース15分程度それぞれ生徒たちに数学を伝える活動をしました。

今回、もともと先輩方がやっていたものとかあったのですが、今回講義の中で自分たちがつくったものも、実際に「マス・フェア」でやりました。今回は、その実際にやった内容を紹介していきたいと思っています。

まず、卓球方程式についてです。分野は相図で、数学との関連は連立方程式となっています。実際に卓球をして、得点を片方3倍で、片方を通常の点数として行い、実際に自分たちで式を立てていくというものになっています。

次に、宇宙の数学についてです。分野は科学で、数学との関連は曲線となっております。ブラックホールをパラボラアンテナで見立てて、500円玉やビー玉を実際に転がしてブラックホールに見立てていました。そして、実際にグラフを見て、科学と数学の関連づけで、数学についてもっと深く知ることができたのではないかと考えています。

次に、4フォーズについてです。分野は数学パズルで、数学との関連は、数の計算となっています。4を四つ使って、中学校で習っているプラス・マイナスの記号や括弧、ルートなどを使って、1から10までの数字をつくるものとなっています。

次に、4色問題です。分野は数学パズルで、数学との関連は、数学の歴史となっています。これは、私が実際にパズルをつくってやりました。4色問題とは、一辺に対して同じ色が重なり合わずに、4色だけで成立することができるというものになっています。実際はコンピューターでは解決されているのですが、数学的には解明されていないということで、このときには未解決事件として、実際に生徒たちにパズルをやってもらって、4色問題ができるということを体験してもらいました。

**○石尾氏** 次に、数列のかなでる音楽ということなのですが、これは私が担当した分野になっていて、音楽と数学を結びつけて、少し数学のよさを知ってもらおうという取り組みで行いました。数学との関連は、数列となっています。

パソコンから、豊富中学校にテレビがあったので、これを通して数列と音楽との結びつき、こういうがあるよというのを教えているという様子になっています。

実際にいろいろ音楽を流してみたのですが、今回は僭越ながらフィボナッチ数列という数列がありまして、その音楽をちょっと聞いていただきたいなと思います。（音楽の音）

こんな感じで、ちょっと今、音が悪かったですが、数列、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10

を音符に置きかえて、今のように流してみると、1曲分、何かおもしろい曲になるなということをちょっと探して見つけまして、数列で音楽と結びつけてやりたいなと思って、僕はここ数列の奏でる音楽という分野を担当させていただきました。

次に、学生アンケートについてなのですが、学生が始まる前に目標として掲げたものと、感想を学生が書いてくれたので、ここを紹介していきたいと思います。

まず、目標に関してですが、生徒に楽しんでもらうということを多く考えている学生がいました。自分自身が考えたものを相手に伝えるということが必要ですが、そこで学生自身が楽しんでないと、生徒も楽しんでもらえないなということも一つありますので、まず生徒に楽しんでもらうということを重要視して、楽しんでもらおうという目標を多く書いている学生がいました。

次に、数学の楽しさやおもしろさを伝えるということなのですが、数学が余り楽しくないとか、勉強したくないとかという中学生が多く今いるのかなと思いますので、大学生も数学の楽しさとか、おもしろさを少しでも中学生に伝えることができれば、この「マス・フェア」という取り組みがすごいいいものになるのではないかなというふうに思う学生が多くいまして、こういう目標を掲げている学生もいたということになっています。

三つ目、数学の世界観を広げてもらおうということなのですが、例えば私の受け持った音楽であったり、先ほどありましたが、宇宙とか、例えば卓球とか、そういう分野で、実際何か数学との結びつきがちょっとないのではないかなという分野と数学を結びつけることによって、ちょっとでも世界観というものを広げてもらうことが必要なのではないかなということで、その世界観を広げてもらおうということで目標としている学生も多くいました。

感想です。三つあるのですが、まず一つ目が楽しく参加することということです。先ほどもお話ししましたが、学生自身が楽しく参加しないと、やっぱり生徒も楽しくないだろうということも一つあって、卓球のほうだと、卓球を担当した学生、すごい卓球が好きな学生で、私も音楽がすごい好きというのがありますし、それで楽しく参加することによって、生徒も楽しんでもらえるのではないかなと、楽しく参加することできたよということが、同じく感想としてありました。

二つ目、楽しく参加することはできたのだが、伝えること、生徒の表情を読みとるということが、ちょっと難しかったという感想が多くありました。自分で考えた内容を、余り伝えるという機会がない中で、伝えることをしなければならぬという状態だったので、余り経験値がない中での取り組みだったのですが、こういうところがちょっと難しかったというのもあり、さっきの写真にもあったのですが、生徒との距離がかなり近い状態で「マス・フェア」という取り組みをやらせてもらったのですが、やはりまだまだ経験値が少ないということで、生徒の表情を読みとるということが、ちょっと難しかったなと思う学生も多くいました。

三つ目です。話す内容の重要性ということなのですが、ちょっと上とも関連しまして、何回も言っているとおり、自分で考えた内容を伝えるという、おもしろさを伝えるということなのですが、やはり話す内容が多くあると、どうしても早口で話してしまったり、逆に少な過ぎて説明不足になって、これは本当に生徒に伝わっているのだろうかと思う学生も多くいまして、そういうことに関して、話す内容の重要性がちょっと必要だったのではないかなという、この三つの感想を踏まえまして、これから「マス・フェア」なり、ぐんぐん塾なり、いろいろなところで改善していける内容だと思いますので、こういう感想を受けとめて頑張っていけないといけない、すごくいい「マス・フェア」だったなと思います。

次に、中学生にも「マス・フェア」終わってからアンケートをいただきました。

まず、一番多かったのは、楽しかったというのがとても多くありました。楽しかったと、さっきの学生の目標のところで、生徒に楽しんでもらうというのが一つあったので、これで中学生のアンケートのところに、楽しかったと書いてもらえたのは、もうこちら側としては、学生側としてはとてもうれしいことで、本当に楽しんでもらえてよかったなと思う部分が多くありました。

また、数学の楽しさや、おもしろさを知ることができたと書いている生徒もいました。これはちょっと

戻りますが、目標として、数学の楽しさや、おもしろさを伝えるということだったので、数学の楽しさ、そのおもしろさを知ることができたというのは、目標がかなったのではないかなと、この上2点ですね。目標がかなってよかったなという、数学取り組みしてよかったというところではあるのではないかなと思います。

三つ目です。ほかのブースも体験したかったというのがあるのですが、時間の関係で、ほかのパビリオンに行けなかったというのがありまして、生徒同士話して、ここ楽しかったよとか、ここ行ってみたかったなという声が多くて、こういうアンケートで書いてくれた生徒もいました。こちら側としても、生徒全員に体験してもらいたいというのが一つあるので、ここで体験したかったなというアンケートをくれたのも、うれしかったです。

四つ目です。日常と数学が関係深いことを知ったというふうに書いています。例えば卓球であったり、音楽であったり、身近なもの、体育の授業とか音楽の授業とかでやっている内容だと思うので、そういうものとの数学のつながり、リンクさせて考えることができるというのは、それもいいことだと思いますし、それをやはりこの「マス・フェア」という取り組みで知ってもらえたというのは、うれしいことだと思います。

最後、5個目に、数学の授業が活気あふれるものになってほしいということなのですが、これはちょっとアンケートとは変わってしまうのですが、最後、中学生の生徒さんに一つ挨拶してもらいまして、そこで出た内容なのですが、ちょっと今数学の授業が余りおもしろくないみたいな感じの言い方をしていました、そこで今回こういう「マス・フェア」という取り組みを行って、最後に、数学の授業がこれからこういう「マス・フェア」を通して活気あふれるものになったらなということを言っていました。これから数学の授業を楽しんでももらえたらなと思います。

最後、まとめです。まとめ二つあるのですが、まず、学生自身が学びとしてどういうことがあったかなというので、先ほどの感想のところでもありましたとおり、自分が楽しくやることができたよという学びの中で、やっぱり楽しくやらないと相手にも楽しさが伝わらないということがありますので、楽しくやるということが重要であり、それが学びにつながったのではないかなと思います。

二つ目です。生徒の目線で一緒に活動するというふうに書いたのですが、先ほど話したとおり、学生と生徒との距離の近いということで、生徒の目線で、今こういう活動をしているということが、もう手に取るようにわかるという状況だったので、その中で生徒の目線でこういうふうに活動しなければならないとか、こういうふうに教えたらどうだろうというのを考えながらやるということで、生徒の目線で一緒に活動するということが学びにつながったのではないかなと思います。

最後、「マス・フェア」を通してなのですが、一つ目、実際に体験することで、学びへの一歩ということなのですが、これはちょっと学生の目線と生徒の目線をリンクさせているのですが、実際に生徒が体験することによって、数学の楽しさであったり、こういうことがあるのだというのを知る機会を持ったことで数学を楽しんでもらえる、わかってもらえるとか、もっと勉強したいというふうに、学びへの一歩につながるというのもありますし、また、学生目線から言うと、実際に体験、教えるという動作をすることによって、教職というところなので、学び、教えるということへの学びへの一歩にはなったのではないかなと思います。

○**渋谷氏** 「マス・フェア」の取り組みというのは、三つの学びの層からできています。

まず、一番下に書いてある第1層なのですが、これは先ほど説明ありましたが、ゼミの時間に学生がパビリオンの目標を設定し、デモ内容を選択、その学習をするわけです。それを教材化する。そして、その教材を試し行いというか、トライアウトするわけですね。その際に、担当教員のほうから、特に教材化の部分に関しては支援をするという形をとります。

それから、第2層ですが、ここに関しては「マス・フェア」そのものなのですが、デモンストレーターの学生が参加者の中学生に対して数学の実験を演じたり、それから中学生にその実験を体験させたりする場面です。

第3層なのですが、「マス・フェア」で参加者としていた中学生が、デモで体験したパズルなどを家に持って帰って、家で家族に対してデモ体験、デモを再現するという、そういう場面です。実は、この3層にはそれぞれ目的というものがあるのですが、第1層と第2層に共通の部分なのですが、学生が数学の指導に対する自信を生む社会的自尊感情の育成という部分があります。特に、今回2年生が教材を自分でつくったという部分にちょっと意義があるのですが、そのつくったものが通用したかどうか、すなわち達成体験を得ることができたのかという部分が、この社会的自尊感情の育成にはちょっとつながっていくというふうに思っています。

それから第2層に、これは参加者の部分なのですが、今回中学生ですが、数学に対する興味・関心の醸成。特に、今新しい学習指導要領に変わろうとしています、その中で資質能力、これに関しては、知識・理解の習得とか、それから思考力・判断力・表現力の育成とか、そして人間性とか、それからここに書いてある学びに向かう力の肝要という部分が上げられていますが、特に一番最後に言った部分、この「マス・フェア」でその部分にかかわることができるのではないかと。

それから、第3層の部分ですが、これは家庭でのコミュニケーションの形成という形で、最近の調査では、若干家庭でのコミュニケーション、中学生も小学生もちょっと高揚してきている部分があるのですが、さらにこの数学という道具を使って、そこをもう少し高められるのではないかなというように目的を設定しています。

そこで教科、今回は数学の部分なのですが、教育から発信する学びの電波による社会教育の遂行など、地域の教育力向上にかかわる学校教育、社会教育、家庭教育への影響が考えられると。

実は、この数学のこういうような実践というのは、日本では類がないので、本学による楽しい学びの場の提供というのは、その存在意義を示すことになるのではないかなと思っています。

今年度、豊富中学校で今の実践発表ありましたが、それから4年生が9月ですか、礼文町立香深中学校でも行いました。それらのデータをまとめて、以後の地域活動報告会の回答で示していきたいなと思っています。

以上です。

**○司会** ありがとうございます。

それでは、ただいまの報告について、フロアから御質問や御意見、あるいは御感想をいただきたいと思っていますので、いらっしゃいますか。

今はないようですので、3報告が終わってからも、もう一度質問と感想をいただきたいと思いますので、第1報告はこれで終わらせていただきます。

第2報告（まちなか振興支援室）

**○司会** 続いて、第2報告。若原先生と学生11名による平成29年度まちなか調査実習中間報告について報告をいたします。

では、お願いします。

**○袴田氏** 平成29年まちなか調査実習中間報告、稚内中央商店街アクションリサーチ／稚内市こどもの貧困問題関連調査の発表を始めます。

まず、私たち2年生は、稚内中央商店街のアクションリサーチについてを発表を始めます。

まず、これの目的として、商店街での地域活動に実際取り組む中で、商店街の現状、課題、店主の意識、地域住民の意識等を探り、それらを踏まえた商店街再生の方向性を探るためのアクションリサーチを行うということです。

作業内容として、商店街MAPづくりと商店街情報、Facebookへ発信、インスタ映えそうな写真を撮影という三つの柱でやっています。

これらの目的として、商店街を活性化させていくため、内容は店の写真を載せる、店の紹介をする。

商店街MAPについて、これは作業工程の一部なのですが、商店街のまちなかメディアラボに、このM

APを張るというようなところで、商店街の写真を撮って、それをプリントして、プリントしたものを、今このはさみで切っているというような作業工程になります。

これは、その撮った写真を張りつけている作業です。

でき上がったものがこちらです。まちなかメディアラボに商店街のMAPとして、このようなMAPを張っています。写真を見やすく張るというところと、お店の名前を書いて、ここにこういうものがあるというのをわかりやすくしたものです。

これで終わりではなく、これからまた違うMAPをつくるつもりでいるのです。これから、これらを生かしたMAPづくりということで、観光客に向けたMAPにしたいというところで、海外から来る観光客がいて、稚内ではロシア人が多いというところで、ロシア人のために、ロシア語バージョンなどもつくっていきたいと考えています。

デザインの使いやすさを追求、使う人の立場になり、必要な情報を。これに関しては、どういう情報が必要なのかなというところを考えて、商店街で私たちが調査した中では、割と専門的なもの、印鑑とかそういうような、これという必要なものが決まっているものが置いてあったりするもので、それがどういうところに置いているのだろかなというのがわかりやすいようにするというところと、MAPの大きさを考えたりしています。MAPが大きくて持ち運びにくかったら誰も持っていかないというところを考えて今現在研究中です。

商店街の情報を Facebook で発信。目的として、全国の人に商店街を知ってもらうため。内容は、お勧めの商品を紹介する。店主の紹介です。

Facebook を選んだ理由として、アクションリサーチの活動内容を載せて商店街に貢献する。そして店主の思いを伝えるというところです。

この二つの画像なのですが、右手の画像が、私たち4人で地域活動をしているのですが、活動する上で、商店街のどの店を誰がどういうふうにやろうかというところで、担当を決めている写真です。

左手の画像は、実際に喫茶店のくるみというお店で、記事のためのインタビューをしようとしている画像です。

私たち、Facebook で発信した実際の記事がこちらです。右手の画像は、商店街のほうに、まちなかメディアラボというところがあって、公式アカウントをつくりました。

実際、今、具体例として出ているのは、為安印舗というところで、ハンコの専門店になります。どういうハンコを使っているの、象牙とかあるよというような記事をつくっています。どういうハンコをつくっているかという紹介と、学生が書いたという名前を書いて、為安印舗さんの住所と電話番号と営業時間、定休日というような情報をまとめて、最後に写真を載せています。

私たちがこれをやっていく中で、壁にぶつかるというところで、投稿を始める前と後の変化。投稿を始めてもアクセス数が、余り Facebook が変わっていない。伸び悩んでいる。Facebook、実際マックスで見てくれる人が650人。平均的に300アクセス等で余り変わっていない。Facebook で成功した商店街を参考に、私たちが成功している事例を比べて改善点を探していこうと思います。

実際に成功している事例として、この商店街が上げられると思っています。

学生がこの写真を見て、学生と店主の写真が載っていて、17「いいね」とかもらっているのですが、私たちは6「いいね」とか、こういうのをまねして改善していきたいと思っています。

次に、インスタ映えしそうな写真の撮影。インスタ映えって、何だということなのですが、SNSのインスタグラムに写真をアップロードし、公開した際にひときわ映える、見栄えがいいという意味で用いられる表現です。目的として、インスタグラムを通して商店街を知ってもらう。内容は、商店街のインスタ映えしそうなものや場所を探すというところです。

インスタグラムを選んだ理由として、若い人に目を向けてもらう商店街の撮影スポットを見つけるためです。

これが具体例なのですが、右の画像はピンク色でかわいらしいイメージの画像で、左側は人が真ん中に

立っていて、羽が生えているように見えるような画像です。このような画像の中で、私たち学生が考えたインスタグラムで映える、いわゆるインスタ映えしそうな画像の定義的なものを考えてみました。

まず一つが、カラフルでかわいい。フィールド上でぱっと目を引くような色彩度の高いもの。

二つ目に、おしゃれな雑誌風。ポスターや雑誌に使われてもおかしくないというようなものです。

三つ目が非日常。日常生活で見なれた光景とかけ離れている。

四つ目が意外性。一般的に世間で浸透しているイメージに対して、大きく異なっているもの。ミスマッチとか、違和感とか、規格外、標準サイズを大きく超えた、または下回ったもの。ストーリー、写真を見ただけではわからないもの、その場所に関するコメントやワードにインパクトがあるもの。世界一、日本一といったものは、インスタグラムではリアクションが大きいかなと。

私たち4人が、これから今後の活動内容として、商店街のMAPづくりをこれからも頑張っていきたい。商店街の情報をFacebookで発信。インスタ映えしそうな写真の撮影。これらを通して、商店街を活性化させていきたいと思っています。

これから私たち2年生4人で頑張っていきたいので、一人一人これまでの研究と、これからどうしていきたいかというような話を聞いていきます。

**○旭氏** こんにちは。商店街についての作業をやっている中で気づいたことがあって、自分は昔から商店街のことは知っていたのですが、昔から余り盛り上がっていないなというイメージがあって、店主もやる気ないのかなとちょっと思いながら僕は過ごしていたのですが、この作業をしていく上で、店主にインタビューをする機会がありました。それで、盛り上がっていないのは、現状も変わっていないのですが、やる気は店主全員あるらしくて、やる気があるなら自分たちが、学生がイベントを企画することが多いので、それで商店街を絡めたことをやっていけば、店主たちも乗ってきてくれるのかなと思います。だからその点では、もっとイベントを多くやっていけたらと思います。

以上です。

**○吉野氏** 私自身、商店街に余り行くことがなくて、いい印象というものがなかったのですが、やっぱりいざこうやって事業という形ですが、商店街に行ってみて、ちょうど私が行っていたときは、金子瀬戸物店というところに行ったのですが、そこでその店主とお話をしているときにも、お客さんが合鍵をつくってくれと言って来たりする人もいたので、勝手な印象で、余り人がいないと思っていたのですが、やっぱり商店街にはロシア人とかもたくさんいて、人がいない場所という決めつけの印象でしかなかったのですが、そうではなくて、商店街もまだ大切に思っている人もたくさんいるので、ではそれに対して何ができるかというところで、こういうFacebookを通じてだったり、マップを使ってだったり、何かできたらいいなと思っています。

**○鴉田氏** 僕は、FacebookやInstagramを通して、僕たち中央商店街に行くだけではわからない部分をFacebookやInstagramを使って紹介していきたいと思っているので、僕たちのFacebookやInstagramの投稿をぜひ見てください。

以上です。

**○袴田氏** 以上で、私たち2年生の発表を終わります。

3年生の皆さん、よろしくお願いします。

**○中島氏** 皆さん、こんにちは。本日はお忙しい中、また、寒い中僕たちの発表を聞きに集まってくいただき、本当にありがとうございます。

本日は、僕はちょっとつたない発表になってしまうと思うのですが、最後までどうぞよろしくお願いします。

ここからは地域デザイン3年の中島拓人が担当させていただきます。よろしくお願いします。

まず、紹介させていただくことになるのですが、地域デザインコース3年の左から山岸君、手挙げて。山口君、勝又さん、吉岡さん、佐藤君になります。この5人で発表させていただきます。よろしくお願いします。



私たちは、稚内市子どもの貧困問題関連調査について、今作業を行っております。

まず、調査の方針として、北海道や全国で行われているような貧困調査は、量的調査がメインとなっているのですが、この量的調査は、数値による表記ではわかりやすいのですが、子どもの貧困の具体的な中身は見えず、ましてや稚内市における貧困の内情は、わかりにくいのが今の現状です。ここで、私たちは、この量的調査に質的調査を加えることで、稚内市の貧困の現状を具体的に可視化することにしました。

次に、調査目的についてです。私たちが調査目的に設定したのは、この三つになります。まず一つ目が、貧困のリアルな姿を具体的に示す。二つ目が、支援の実際の総体を具体的に示す。そして最後に、育ちのプロセスの実際を具体的に示すというところです。

この三つの調査により、稚内市における数値にはあらわれない貧困の実態を明らかにして、市民全体で共有することを目的としています。

この調査をするに当たって、私たちは事前学習を行いました。まず、子供の貧困ハンドブックという著書を利用し、日本の子供の貧困の実態、また、連鎖の原因などを学び、子供の貧困に対する知識を深めました。この本から学んだことを一部上げると、貧困の定義について、厳密に一致した定義があるわけではないということを学びました。

今までの私たちの貧困のイメージでは、金銭的に厳しい、環境的に厳しいというあいまいなものだったのですが、今広く受け入れられているのは、社会生活を営むための必要を充足する資源の不足、欠如という考え方でした。つまり、人間が生きていくためには、必要なもの、事があるという当たり前のことを出発点に置き、それが充足されていないことを貧困と言うわけです。

次に、子供の貧困連鎖ストップ講習会に参加してきました。子供の貧困を理論的・実践的な視点から学習しました。ここでも、やはり近年の貧困は見えがたいというテーマが主題となっていて、絶対的な貧困のイメージが強い一昔前から、現在の総合的な貧困を理解することの重要性を学びました。

こちらが、そのときの修了証となっています。一応展示しておきます。

そして稚内の子ども、若者、稚内市子どもの貧困問題プロジェクト研究紀要を使用し、シンポジウムの内容や各学校の教員、また、各機関、関係者のレポートを研究し、事前に学習を行いました。この研究紀要での小・中学校の校長先生の多くに、自己肯定感という言葉が登場し、重要視されています。

渡辺久子著、「自己肯定感の危機にある子どもにわれわれはなにができるか」からの言葉を抜粋すると、自己肯定感は乳児時期から子どもがあるがままの自分として理解、尊重され、発達段階に適した活動を与えられる中ではぐくまれる。子どもらしい遊びと甘えが乏しく、周囲の大人の葛藤や緊張にさらされると、子どもは自己否定感を強く抱くようになるとされ、親が子どもに対する愛情、また、地域の大人の子どもへの接し方が大きく影響してきます。つまり、子どもは自分を認められること、必要とされることで自己肯定感を増し、その逆に、大人からの圧力が大き過ぎて自分が出せない状況が続くと、自己否定感がふえるということです。このように、学校教育や家庭教育においても自己肯定感が非常に重要とされています。

それでは、ここから調査内容の具体的な説明に入っていきます。

まず、その1、子ども、若者の貧困のリアルな姿を具体的に示すと先ほど述べたのですが、支援、ネットワーク、4地区へ聞き取り調査をし、子どもの貧困エピソードを収集し分析します。

エピソードをたくさん集め総合化、再構成し、貧困状態にある子ども、若者のペルソナを構成します。つまり、調査によって得られたエピソードを私たちがまとめ、稚内市における貧困をどのように経験して、子供がどういう状態にあるというのを仮でつくり上げるということです。そうすることにより、イメージしやすくなります。この仮というのは、プライバシーに配慮して、実際に書き起こせないため、あえて仮のイメージといたします。

調査目的その2、子ども、若者の支援の実際の総体を具体的に示すというところです。ここを今説明したいと思います。

ここでは、子ども、若者の支援専門職、関係者10名に対しインタビューを行う予定です。半構造化イン

タビューと記載していますが、この半構造化は、質問事項はある程度用意しつつも、インタビュー対象者の口から出た言葉をさらに深く聞いていくという意味で、半構造化ということにしています。このインタビュー調査により、稚内市の貧困対策支援と、その関係団体の関連性を具体的に示し、発達段階、また、生活場面ごとの子ども、若者支援の抽出と具体化をしていきます。

調査目的その3、子ども、若者の育ちのプロセスの実際を具体的に示すについては、稚内市に生まれ育った人物のライフヒストリーを調査します。調査対象は、本学を卒業した男女4名で、子ども、若者の主観的な育ち、育てられてきた経験についての語りを聞き、改めて自分の育ちから稚内市の支援や地域の環境、地域支援を解釈しようとする試みです。

以上、この三つの調査で、稚内市の貧困を具体的に可視化していきます。

この調査成果につきましては、次回以降に開催される本学の地域活動報告会での発表と、稚内市子どもの貧困プロジェクト研究紀要、稚内の子ども、若者 2017 にて公表を予定しております。

また、本日 18 時半より行われます、稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議では、本学が潮見地区に位置していることから、潮見が丘地区の発表で、私たちの制作した子供たちの夢を応援するポスターと動画を公表させていただきます。この写真は、そのときの会議だったり、話し合いだったり、その動画の撮影風景になっています。ぜひ今晚文化センターにてごらんください。

以上で、中間発表を終わらせていただきます。御静聴ありがとうございました。（拍手）

**○司会** ありがとうございました。

それでは、ただいまの報告について、フロアから御質問、御意見や、あるいは感想をいただきたいと思っておりますので、いらっしゃいますでしょうか。

なさそうですので、それでは次の報告が終わってからも、もう一度質問や感想をいただく機会もありますので、第2報告は、これで終わらせていただきたいと思います。

### 第3報告（地域観光支援室）

**○司会** それでは、報告最後となります。第3報告は、情報メディア学部教授の Bishnu Prasad Gautam 先生と情報メディア学部4年、Krishna Prasad Bhattarai さん、研究生の Bhagawan Rokaha さんより、Potential and Enhancement of Cultural Tourism thereby Integrating IoT (Internet of Old Things) -A Case Study of Aamako Janto-について報告いたします。

では、お願いします。

**OBishnu Prasad Gautam 教授** 学生、今ちょっと別な形で後ろにいます。研究生の Bhagawan 君と4年生の Krisna 君、後ろにいます。

この発表タイトルは、IoT、旧来物のインターネットとの融合による文化観光の可能性と充実、特に Aamako Janto、こういう製品の研修スタディーについて報告いたします。

まず、主な内容なのですが、研究背景を話した後に、研究の目的と、現在どこまで進んでいるかという、そういう準備状況を話して、最後にデモを行います。

まず、背景なのですが、現在世界中でいろいろな技術の発展により、特にドイツでは、インダストリー 4.0 というのが出ております。これは、特に IoT とクラウドの技術を連携して、今までの古典的な開発手段よりも、別な形でものづくりをすることによって、まちづくりの革命化を行おうという取り組みです。

同じく、米国では IIC というインターネットコンソーシアムというのが既に設立されて、これでもかなり多くのことを検討されています。

では、日本はどうなっているかということなのですが、日本ではややおくれていると言われています。ただし、かなりおくれているのではなく、国家的にインダストリー 4.0 といった名前をつけられてはいたのですが、会社レベルで、例えば NEC だったら、インダストリー IoT、富士通でしたらスマートなものづくり、あるいは三菱、e-F@ctory とか、CC-Link などの名前をつけて、新しい生産の方法を研究されていますし、例えばトヨタだったら、トヨタのものづくりの手法が世界じゅう優位な手法もあります。


では、このインダストリー4.0というのは、ドイツで始まったものなのですが、こういった技術を特に注目しているかという、IoTですね。これはInternet of Things といって、もののインターネット。ロボットあるいはM2M、これはMachine to Machine ですね。マシンがマシン制御している技術です。これは不可欠なAI、人工知能ですね。こういったものを流出へ、大量生産とか生産の自動化、当然省エネ、セキュリティとモビリティ、こういったキーワードに注目して物事を開発しています。

このような背景によりますが、これは特に大きなまちづくりですね。大きなこういうシティーとかの開発にとっては非常に向いているのですが、世の中にはちょっと小さなまち、田舎とかいうまちもあります。そこではいろいろな問題があります。例えば、Population decline とか、人口が減っているとか、高齢化社会とか、こういう若者のない社会を英語では、ユートウネスと言います。あるいは高齢化社会は、プットネスという言い方をしますが、ユートウネスとプットネスがふえてしまうと非常に大変だ。ちょっと失礼な言い方なのですが、こういうふうにして自分の田舎にはいろいろな問題あるよということを訴えているわけですね。

では、そういった問題をどうすれば解決できるかというときには、最近よくはやりのスマートコミュニティ、そのコミュニティをもっとスマートにしようという、単なる技術だけではなくて、人々の教育とかも、それも含めてスマートにしよう。スマートコミュニティ、いろいろな要素が含まれています。後ほどそのいろいろな要素が含まれているという点、図を見せますが、特にこの研究では、スマートツーリズムに特化して、スマートツーリズムを推進することと、STPF というのは、本研究室で文部科学省の萌芽研究をいただいておりますが、これとこれを融合し、できればこういう産業復興を推進するということを目的にしています。

では、スマートコミュニティは、今は世の中でいろいろな定義があって、定まった定義はないのですが、国の特徴によって重点する項目が違うのですが、だいたいピックアップすると、このようにスマートエネルギーだったり、スマートライフ、アンド、リビング、教育、エディケーショナルコラボレーション、スマートコミュニケーション、通信ですね。交通、トランスポーターション、モビリティ、スマートサービス、ガバナンスとスマートエクセレンス、インボルブメント、スマートツーリズムなどがあります。この研究では、このスマートツーリズムというものに重点を置いているということです。

主な目的としては文化観光、特にスマートツーリズムの中でも文化観光の可能性は充実を、観光の文化的や経済的側面の関係にIoTの技術を融合し、ネパールや、あるいは宗谷地域、住民とともに発展させていくのが目的であります。当然産業復興を推進して、まちづくりに貢献するというのが本研究の目的であります。

そこで、ではどういうことをすればいいかという、もう1回インダストリー4.0の重点分野をピックアップして、そこでこういう健康と食品とツーリズム、この2点について注目をいたしました。これらを実証できる、あるいは融合する何かないかということを考えたときに、出てきたのはAamako Janto です。では、Aamako Janto って何でしょうか。後ほどちょっとAamako と Janto という、Aamako というのは母親という意味です。Janto というのは石臼ですね。そういう伝統的、あるいは旧来機器をいろいろ調べてみましたところ、ネパールではこういう Janto、Stone Grinder と言うのですが、日本では石臼。そのほかにも、こういうウッドペストルというジキというのがあります。日本では杵と臼に似たようなもの、ちょっと違うのですが、あるいはこういう 、winnowing、日本では唐箕、ふるいなどですね。こういう古典的な機械があるということが調べるとわかります。

ちょっと写真を見せます。ザットというのはこのようなものです。ジキというのは、ここにこういう棒がついて、ここペストルを押してやると、こうはねて、どんとものをたたくと。日本では手で餅づくりやるのですが、向こうでは足でやります。こういった機械があります。

もう少し進んだもので、これもきれいになっていまして、ここから米とか麦とか入れて、水で回すのですね。これあとパンニガッタという機器です。あるいはシロート、これはローラー、2方向に動かすというやつ。もともと人間というのは歯でものを砕いたわけですが、この歯を成長して石にかわるわけですが、

これを2方向に、ものを1方向にどうやってしたのかという、これはなかなかそういった資料がないです。いつどういうふうにつくり始めたか、そういう資料は今のところ見つかりません。

さて、日本の旧来物の、この石臼なのですが、日本ではこういう6分画とか8分画というふうになんとなくでき上がって、これはいつごろ出たのだろうと言うと、大体仏教が入ってきたころに、これも一緒に入ってきたのではないかと資料が残っています。こういった、これが正しいという資料はなかなかないのですが、大体9世紀から13世紀の間に、こういったものが日本にも入ってきたという資料が残っております。

また、こういう千石通しという、もみ刷りをした後に、玄米もみ殻を選別する農具。皆さん見たことありますか。恐らく、もうないかもしれないですね。

では、旧来物のインターネットにちょっと話を戻しますが、ネパールでは実はいまだに使っています、田舎のほうで。これは手で回しながら使います。これは最近のまだ使っているよという写真です。伝統知識をこういうIoT、Internet of Things、これは旧来物というWorld Things、昔のものもIoTによってつなげると、そういうふうにしてIoTという言葉をつけました。

では、これが実際の映像ですね。こういう田舎でうちの母親がまだ使っていると。ちょっと送ってもらいました。こういうふうにとウモロコシ、実はマシンでちゃんといろいろあるのですが、それよりはなぜ石がいいのかという理由は、後ほど説明いたします。

よって、では今の準備はどこまで進んでいるかというところを少し説明したいと思います。

まず、開発シナリオです。石を買ってきて、実際に掘り起こしました。実際にこういった機械で、うち情報系の大学なので、なかなか工学系のものは持っていないですが、そういったものを何となく集め始めてつくったのですが、結構大変です。この石掘ったり、穴あけたりするのは。

これも、それに必要ないろいろな部品を切っておきます。これが、ちょうどビデオありますので、それを少し見ていただきます。

#### (動画)

こういう感じで、これが実際に、これは非常にスピードが、回転が早過ぎて、なかなか制御するのが大変だったということで、ここはいろいろな課題があります。まず、スピードが速すぎると制御するのが大変。また、スピードが速いと粉の粉度が大きくなりますので、それを電子的にどう制御するかという課題がプロットタイプ一つで見つかりまして、それをちょっと直したバージョンがこれです。

#### (動画)

ちょっと後ろにこの機械が今展示しているので、後ほど見ていただきたいのですが、これを制御するための電子回路を自作し、その後、制御するためのアプリケーションをつくらなければならないので、そのアプリのプロットタイプをきのうまでで大体終了しました。それをパワーポイント、遅くなって申しわけなかったのですが、一応後ほどゆっくりと興味のある方は、ぜひ見ておいてください。

将来の展望、Future Work。将来的には、僕の研究室のSTPFというSmart Tourism Process Frameworkという研究と連携しながら行きたいと思います。主にVRの技術を利用して、それをAR技術によって制御するというと同時に、こういった体験を観光客に楽しんでもらうということを考えております。

STPFというのが推進するスマートツーリズムとは、ツーリストの観光、生活の質、QOLを高め、環境負荷を抑えながら成長できる観光都市を目指すものであるというのは、STPFが推進しているスマートツーリズムであります。特にVRを用いたさまざまなツールやアプリケーションを開発し、観光客が訪問のできない観光スポット、あるいは文化観光スポットなどを仮想的に再現し、それを仮想観光空間として体験できるようにするというのが、ちょっと未来の展望です。

この後の年度内、あるいは来年度までの計画としては、複数のこういう従来物との連携、センサーやIoTの技術を利用して、もう少し実装する旧来物をふやす。宗谷地域では、例えばコーヒーを砕くような機械として利用ができるかどうか、その可能性を検討する。

稚内というのは、コーヒーを初めて飲まれたというまちでもあって、こういうふうブランディングし

ていくというのを一つ考えています。あるいは大学発ブランドとしてのコーヒー、小麦や、あるいは米の粉として製品化することも可能ではないかというふうに思っておりまして、これも一つ検討しています。

ネパールのほうでは、ネパールのディタール村というのは、僕の通信系の研究で毎年この通信インフラを今構築していますが、そこの現地実験とフィードバック、村の人に使ってもらおうと。まずはこのザットを母親に渡して使ってもらいたいなと思ひまして、その後徐々に村全体で利用してもらうことを考えています。これによって、村ごとIoT化していこうということは、今後の計画です。

まとめです。まず主な成果物としては、Aamako Jantoのプロットタイプとそのアーキテクチャを開発することができた。特に物理層、我々ネットワークの言葉で言うと、物理層からアプリケーション層までの全てをラボで開発し、初めて古典的なザットのIoT化に成功した。我々はこのような旧来物のIoT化を、IoTというInternet of Old Thingsと呼ぶことにしていると。

今後の活動として、日本とネパールの古典的な知識、例えばアイヌ民族などの相違点や比較を行い、それらの文化的、経済的側面を深く分析することでまちづくりに期する。これらの推進による文化観光の可能性を探るといのが、今後の活動となっております。

まだこの辺分析するまでには至っていないのですが、今とりあえずものづくりから始めているということです。

そこでいつも学生に言うのですが、ものづくり、イノベーション、あるいは成長というのは何ですか。そういうふうに考えるとき、成長というのは、いろいろな形で成長できるのだと。技術においても環境に優しい、しかも持続可能な成長を目指す必要があるというふうに考えています。よって、古典的な知識というのは、何千年も前から我々の祖先が考えた知識ですから、必ずそこは環境に優しい、持続性がもう証明されているわけです。それを破壊していくと、社会が壊れていくということから、こういう観点から、また古典的な知識を守る方向で考えていきたいと思っております。

以上、ありがとうございます。

会場の裏側には、展示しているAamako Jantoをごらんになってください。また、これを利用して砕いた米の粉からできたロティとチャイ、今学生のほうからサービスしてくれますので、ぜひ味を見てみたい方は遠慮なく味をみてください。

ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

それでは、フロアから質問、御意見や感想をいただきたいと思ひますので、いらっしやいませんか。

マイクを回しますので、少々お待ちください。

○質問者 お疲れさまです。多分ちょっとぼんやりして聞き逃しただけだと思ひのですが、何で石臼をつくっているのだらうというところわからなくなったので、ちょっと目的のところをもう一回説明していただけますか。

○Bishnu Prasad Gautam 教授 文化観光の可能性や芸術を観光の文化的、あるいは経済的側面の関係にIoT技術を融合して、ネパールだけではなくて、宗谷地域の住民とともに開発させることによって、まちづくりに貢献するという研究の目的です。

○質問者 ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。

ほかにご覧いませんか。

なさそうですので、第3の報告は、これで終わらせていただきます。

本日予定しておりました、口頭報告3件を終えました。何か聞き逃したこととかコメントがありましたらぜひお願いしたいと思います。いかがでしょうか。よろしいですか。

それでは、プログラムに入っておりますアンケート用紙に御記入をいただければ幸いです。

ポスター報告に移りますので、口頭発表はこれにて終了させていただきます。

最後に、本学COC事業推進責任者である佐賀副学長より、閉会の御挨拶がござひます。お願いします。

○佐賀副学長 みなさん、こんにちは。事業推進室の責任者をしております副学長の佐賀と申します。

本日の発表でしたが、このCOCの事業ですが、地域の課題をいろいろ解決するということはもちろんですが、そこを通して、学生が大学で学んでいる専門性を生かしていかにより地域の課題と向き合って、そして成長できるのか、成長をうながせるのかというところが、多分第一番の目的となっております。そういった意味で言いますと、本学の教員のほう、全員その趣旨をよく理解していただいて、授業の中でそういったことを取り入れて、また、学生の皆さんもいわゆる授業時間外の活動もたくさんあるかと思うのですが、そういったところで力を発揮していただいて、きょうのような発表というもの、最初のころはなかなか学生の皆さん、発表するという形ではなく、教員が代表して発表するという形も多かったですが、年々学生自身が発表して、自分たちがやってきたことを自分たちの言葉で発表できるといったようなことにもなってきておりますが、そういった意味では、本当に意義深い活動にさせてもらっているかなというふうに考えております。

先ほども少し話が出ましたが、この後ポスターセッションがございますので、このCOC事業から発生した、あるいは発展させていくようなプロジェクトの発表ですとか内容もありますので、ぜひお時間のある方はこちらのほう、この後発表があると思いますので、御質問等いただければと思います。

また、先ほど一部ありましたが、本日 18 時半から人口対策のシンポジウムが稚内市の文化センターのほうでありますので、もしお時間のある方は、また引き続きお越しいただければと思います。

ということで、非常に皆さんお忙しいところありがとうございました。学生がきょう非常に頑張ったなと思われた方はぜひ、司会のギリさんも含めて、頑張ったなと思われる方は拍手していただければと思います。（拍手）

どうもありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。

本学では、12 月 9 日に、昨年より取り組んでおります Santa Run を始め、多くのイベントに学生、教職員が参加いたします。これからも地域のフィールドに研究、教育活動を行ってまいりますし、大学の取り組みを通じて地域に貢献していただきたいと考えています。地域の皆さんも御支援や御協力をいただければと考えております。よろしくお願いいたします。

この後はポスター報告として、自由解散とさせていただきます。お帰りの際、アンケート用紙の提出に御協力ください。

また、18 時 30 分より、文化センターにて第 2 回COC地域シンポジウムもありますので、ぜひそちらにも参加いただければ幸いです。

本日は、ありがとうございました。（拍手）

### 第1 報告

#### ○ 報告者

佐美俊輔（稚内北星学園大学 情報メディア学部 准教授）

#### ○ 報告題名

運動部学生による地域のスポーツ文化構築に向けた取り組みとその可能性  
ー稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例にー

#### ○ 報告内容要旨

稚内市では、平成 32 年度をめどに、通年利用可能な「カーリング場」の建設が予定されている。本研究は、本学で設立された「カーリング部」の学生による部活動を事例に、学生たちの取り組みを俯瞰的に観察することで、大学運動部による稚内市のカーリング文化の構築や、地域づくりに向けた可能性を探ることを目的としている。本研究は、学生によるカーリング部の取り組みを「スポーツ」の枠組みにとどまらず、学生、地域住民、地域づくりなど多様な視点を取り入れた分析を試みる。

### 第2 報告

#### ○ 報告者

斉藤吉広（稚内北星学園大学 学長）

#### ○ 報告題名

宗谷地域研究所のプロジェクト

#### ○ 報告内容要旨

宗谷地域研究所は、「“宗谷本線、天北線のヒストリー&ストーリー”可視化プロジェクト」に取り組んでいます。沿線の歴史と文化と産業に関わるさまざまなデータを、年次的にマッピングしていき、地域の変化を“見える化”しようという試みです。

現在、地域の有識者にも参加していただきながら研究を進めています。また成果を順次インターネット上で公開して地域の声に応えながらで作り上げていく、増殖するデータベースを目指しています。



## 運動部学生による地域のスポーツ文化構築に向けた取り組みとその可能性

～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～

○侘美 俊輔

### 研究目的

本研究は、本学で設立された「カーリング部」の学生による部活動を事例に、学生たちの取り組みを俯瞰的に観察することで、大学運動部による稚内市のカーリング文化の構築や、地域づくりに向けた可能性を探ることを目的としている。

### 稚内とカーリング

- ・ 1989年「はまなす国体」の最終候補地
- ・ 稚内市カーリング場の老朽化
- ・ 小学校～高校、大学の体育でカーリング授業
- ・ 2019年を目途に、新カーリング場が完成予定  
⇒市内で「カーリング場建設問題」となる



スポーツⅢの授業風景 2017年1月実施@稚内市カーリング場

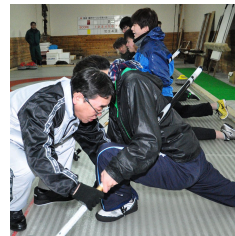
### カーリングに固有な特徴

- ①オリンピックの正式種目としての歴史の浅さと日本の競技レベルの高さ  
→ i) 長野オリンピック(1998)において正式種目  
ii) 「LS 北見」2016 女子カーリング世界選手権 準優勝
- ②国内のカーリング環境の乏しさ  
→ 国内「カーリング専用施設」: 11 カ所  
通年利用可能なカーリング場: 道内に3カ所, 道外 1 カ所
- ③カーリングのグローバルな可能性  
→ 北見市常呂町  
i) 毎年多くの国際大会へ参加する選手を輩出する(グローバル)  
ii) 多世代の交流の場として機能するリーグ戦が行われる(ローカル)など、カーリング文化が根付いている(大沼, 2010).  
iii) カーリングは、トップアスリートとしての寿命が長く、生涯スポーツかつ競技スポーツとしての二面性を持つ「特殊なスポーツ」
- ④カーリングの物理性～ICT 的側面からの応用可能性～  
→ 物理学の理論が応用できるスポーツ  
PC, ICT面からの応用

本研究は、個人情報保護の観点から、個人情報、その他個人が特定されないように十分配慮する。また聞き取り調査の実施に際しては、調査協力への同意得られるよう事前に十分に説明する。

### 申請者の関心

- ①学生にとってスポーツがもつメディア性や、地域づくりとしての可能性を学ぶのでは？
- ②運動部活動を設立から時系列に観察することへの関心



カーリング部の初回練習 2017年2月@稚内市カーリング場

### 申請者の問題意識

- ①カーリング部に参加している学生たちはどのような多面的な学びをしているのか？
- ②カーリング部には稚内市の「カーリング文化」の構築に向け、どのような可能性見られるのか？



カーリング部の合宿風景 2017年9月実施@カールプレックスおびひろ(帯広市)

### 研究計画

- ①スポーツまちづくり、カーリングの理論的研究
- ②カーリング部の入部当初の学生への意識調査
- ③カーリング関係者へのインタビュー調査
- ④カーリング部学生たちへのアンケート、インタビュー調査
- ⑤一般学生によるレポート課題からの意見分析





## 2. アンケート集計結果

---

### <調査の概要>

実施年月日：平成 28 年 2 月 14 日

出席者数：80 名

調査回収数 49 枚(出席者数に対する回収数の割合 61.2%)

### <凡例>

- 1) 当該設問に対する回答数を「n=」で表記した。
- 2) 自由記述については、回答者の意図を損なわぬよう、原則として原文の形で取りまとめた。

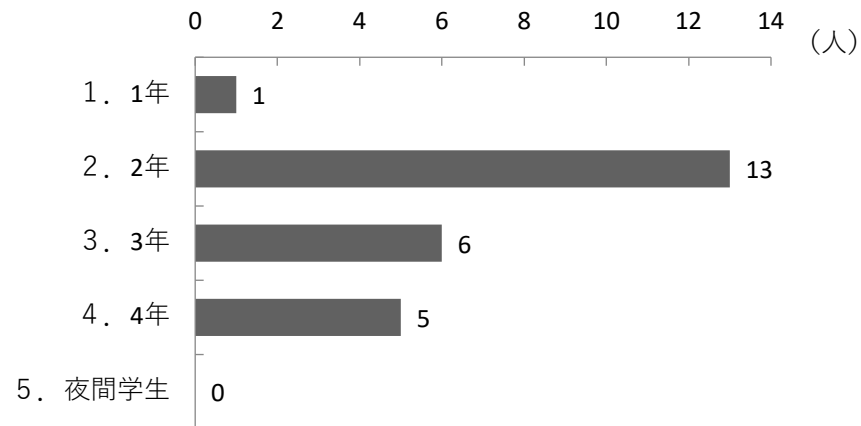
### <結果の概略>

当日参加された 80 名の方のうち 49 名の方より回答を得た。

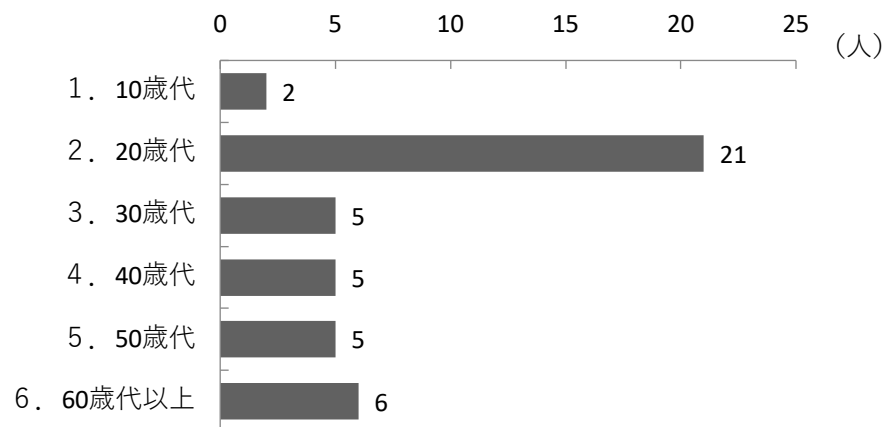
「報告会に来てよかったと思いますか。」との質問に対して「大変良かった」が 13 件、「よかった」が 22 件であり全体の 7 割を占めた。また、「大変良かった」と回答いただいた方の自由記述には、「改めて大学の活動内容を再認識し、地域の課題を発見できた」や「知らなかったことや現状、進んでいる取り組みを知れたため。」という意見を頂いた。

(1) はじめにあなたの学年 (学生のみ回答)、世代、所属をお聞きます。(各1つに○)

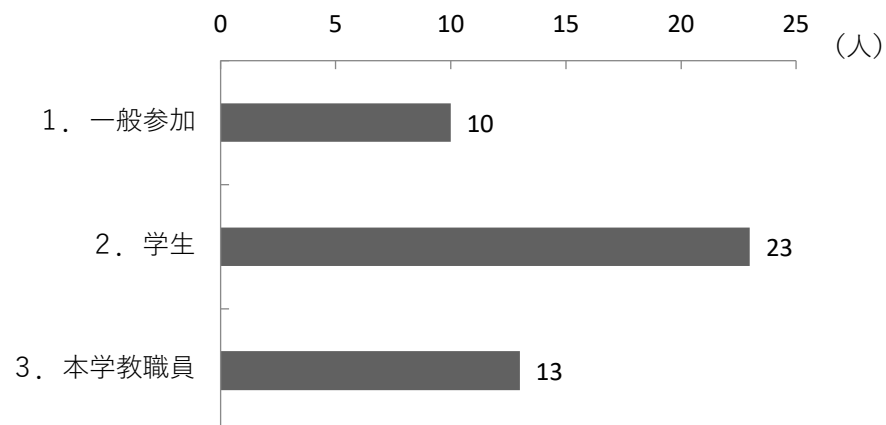
① 学年 (学生のみ回答) n=25



② 世代 n=44

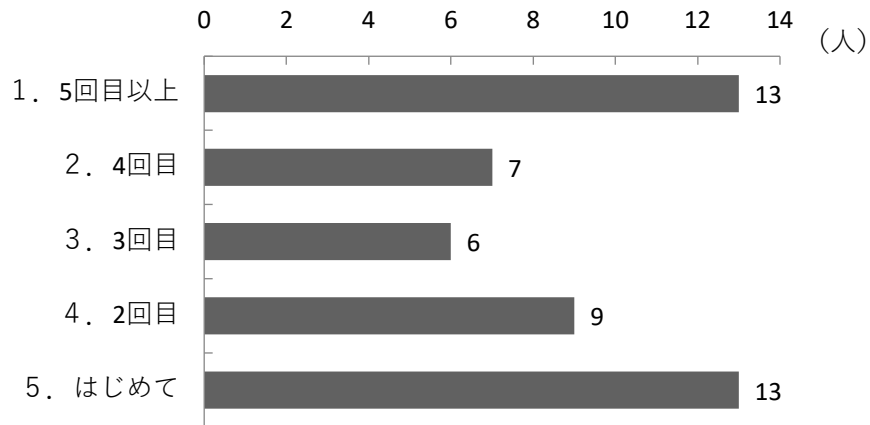


③ 所属 n=46



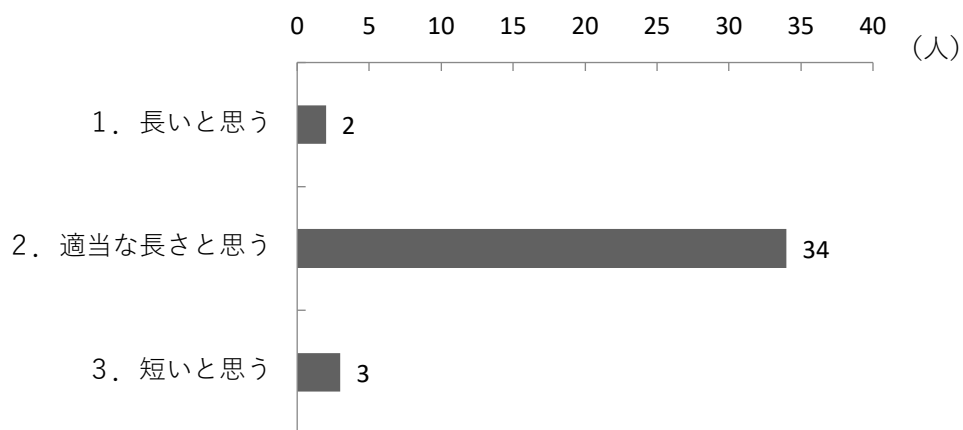
(2) これまで、本学では地域活動報告会5回、シンポジウム2回を開催しました。何回目のご出席かお聞きます。(1つに○)

n=48

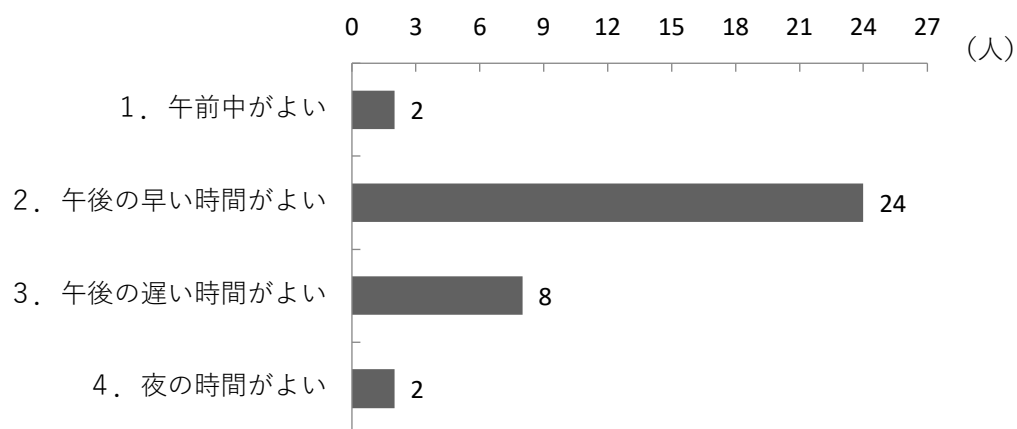


(3) 地域活動報告会の長さ、開催時間についてお聞きます。(各1つに○)

① 地域活動報告会の長さ n=39

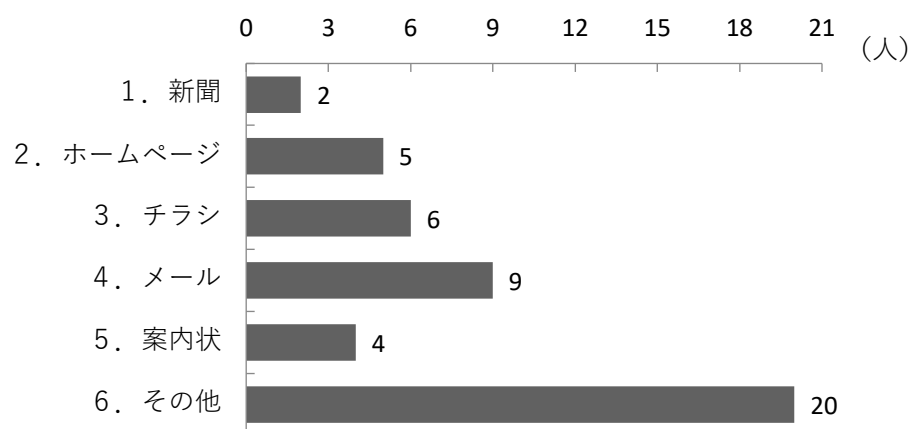


## ② 地域活動報告会の開催時間 n=36



## (4) 今日の地域活動報告会を何で知りましたか。(複数回答可)

n=46



<その他の記述>

授業・講義

口頭

先生・大学教員

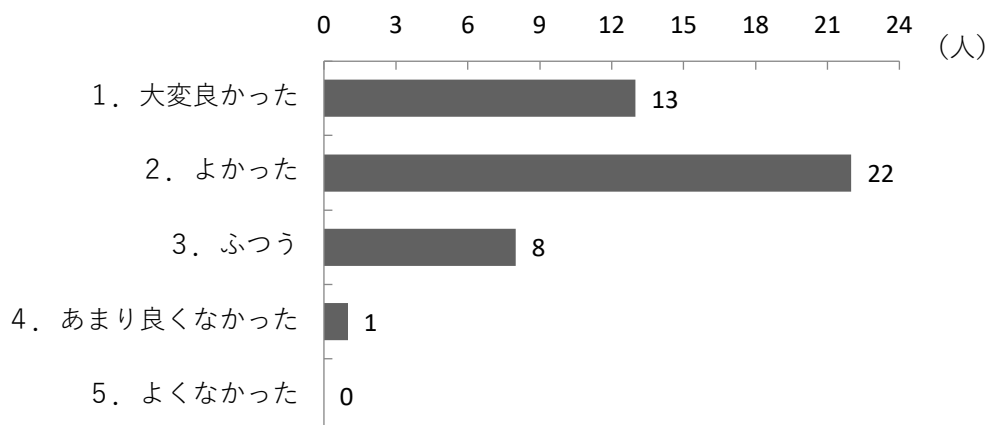
大学

報告者

ゼミ

(5) 地域活動報告会に来てよかったと思いますか（1つに○）

n=49



「1. 大変良かった」を選択した理由（自由記述）

改めて大学の活動内容を再認識し、地域の課題を発見できた（学生）

他の学部が何の研究をしてるか知ることができてよかった（学生）

学生がたくさんの活動に参加していることを再度しれた（学生）

充実した報告会だった（学生）

他の学生の研究を知る機会になった（学生）

学生一生懸命頑張っている姿は見えますがしかしその出口どこにつながるのか見えにくいと感じました（学生）

学生の学びがよくわかった

本学の学生さんの頑張りをよく知る事ができました（本学教職員）

学生が主体的に学び研究している姿がとても印象に残っています。今後もさらに会が発展することを願っています。（一般）

「2. 良かった」を選択した理由（自由記述）

周りの人が大学で何を学んでいるのか聞けて良かった（学生）

知らなかったことや現状、進んでいる取り組みを知れたため（学生）

わかりやすかった（学生）

他チームの内容(研究)を知ることが出来よかった（学生）

普段、何気なく学校生活をすごしていると他のコースがどんな事を行っているのかしることがないから（学生）

学生が主体的に学び研究している姿がとても印象に残っています。今後もさらに会が発展することを願っています。（一般）

大学の研究状況やCOC事業を具体的に知ることができた（一般）

今の学生の実態を知ることができました発展的な発表を見るのは楽しい（一般）

大学の研究内容を知ることができた（一般）

### 「3. ふつう」を選択した理由（自由記述）

期待しているような発表が聞けなかった報告もあるため（学生）

（6）今後、このような地域活動報告会や講演会、シンポジウムで取り扱ってほしい内容や話題（学生、本学教職員は行いたい内容や話題）をお聞かせください。

今後、大学と地域のつながり（学生）

マスフェアや取り組みを知り報告したいと思う（学生）

子どもの貧困（学生）

市内観光の可能性について（学生）

市町村消滅について（学生）

ITについて（学生）

学びの場はいつも魅力的です（一般）

数学教育に関する報告を沢山聞いてみたいです（一般）

（6）さいごに、各報告等についてご感想や激励のメッセージをお聞かせください。

## 報告①

マスフェアを通して数学の良さや、楽しいと思わせる努力を知れた(学生)

ぜひ石尾君に数学を教えてもらいたい(学生)

報告お疲れ様です。写真などが多くわかりやすかったです(学生)

緊張しているなあって思った(学生)

おもしろい発表でした。これからも頑張ってください(学生)

引き続き活動頑張ってください(学生)

これからも地域にマスフェアが根づくといいですね(学生)

楽しく学ぶという点において十分に興味をひくような実践だと思いました。(学生)

マスフェアはとても面白い取り組みだと思います(学生)

子どもの学びとともに学生の学びを聞くことができてよかった(学生)

具体性があるとなおよかった(学生)

事例がわかりにくかったので、2つくらいの事例をほりさげてくれるとなおよかった(本学教職員)

学生は少し緊張しているようですが内容はともしっかりしていてよかったと思います(本学教職員)

マスフェアを終えた現在の意識調査のデータが知りたかった(本学教職員)

学生の一生懸命さが伝わりました(本学教職員)

マスフェアを通して学生がどのように学びが深まったのかよくわかりました(本学教職員)

発表が上手でした(一般)

教える側にも「場慣れ」が必要です。何度もチャレンジしてください(一般)

地域貢献として数学の教師にむけて頑張ってください(一般)

スライドを工夫するとさらに良いと思いました。(一般)

## 報告②

Facebook を利用した中央商店街の復興をしれた(学生)

報告お疲れ様です。表題が見にくいところがありました。(学生)

目的に向けた取り組み研究が行われている(学生)

活動の様子がわかりました。これからも頑張ってください。(学生)

商店街が活気づくようにおうえんしています(学生)

現在のまちなか稚内の現状を知ることが出来たのは良かった(学生)



子どもの貧困については今後の課題ですね(学生)

実際に町に出たの調査は大事だと思いました。(学生)

町づくりについて最近の話題に沿って考えられていた(学生)

稚内地区の貧困問題をより市民目線で知ることができるのを楽しみにしています(学生)

3年生の発表が特に良かった。成果はwebで公開してほしい(学生)

データとりの結果(第1項目)が興味深いです(本学教職員)

市民への発信の方策が必要だと感じた。課題は共有されていると思う(本学教職員)

学生として市の発展を願う姿勢に感心しました(本学教職員)

2,3年生共に深く学びが進んでいるとわかりました。2,3年生の学びが相互に連携できるといいですね(本学教職員)

商店街の話もっと聞きたかったです。どんなお店がおすすめかなど興味がありました私の働く大学でも同じような取り組みがあるので(一般)

英語の発信や商店街への提案ができればいいです。貧困の具体像をつかむことで支援を具体的に考えられる(一般)

2年 若者らしいストレートな感性で頑張ってください。3年 難しいテーマですね(一般)

店主のヤル気をおこさせる取組が必要だと思う(一般)

発表時に原稿をそのまま読むのではなく、より具体的に話すとよいと思います。(一般)

### 報告③

難しい問題だと思った(学生)

話が難しすぎたが何かすごいことなのは伝わった(学生)

報告お疲れ様です。(学生)

観光地に向けた取り組みとなっている(学生)

わかりやすい発表でした。これからも頑張ってください。(学生)

とても興味のひくものでした(学生)

IoTの技術と稚内・ネパールとの結びつきが知れる(学生)

宗谷といたら何を作ればよいのかなと思います(学生)

非常に興味深い内容の発表でした。(学生)

traditional equipmentの進化が楽しみです(学生)

IoT という concept はとてもおもしろい (本学教職員)

旧来物(石臼)についてはよくわかりましたがそれを利用(IoOT), cultural tourism にどうつながるのかよくわかりません「古典的な janto の IoT 化に成功した」 (IoOT 化)という理由づけがよくわかりません (本学教職員)

利便性を求める社会風潮の中で「ものづくり」の IoT 化はより日本的で興味深かった古いものと新しい技術の融合がおもしろいですね (本学教職員)

面白いアイデアだと思いました。今後、学生の活動がもっと見えるといいですね (本学教職員)

スマートコミュニティやスマートツーリズムについてはちょっとわかりました (一般)  
色々と勉強になりました (一般)

## 全体

学生を含め教職員が何を研究しているか知ることができてよかった(学生)

忙しい中、準備、発表お疲れさまでした。とても良い報告会でした。(無回答)

大学と地域の活動がわかって良かったです。(学生)

各発表ごと分野が違い、面白かったです。(学生)

地域において何ができるかということを考える良い機会では(学生)

みなさんおつかれさまでした(学生)

今回も面白かったです。(学生)

「発表者らしさ」が欠けているようにみえた(学生)

来場者の声コメントがなかったのですこし残念でした(本学教職員)

PC を持ち込んでいる人は何をしているのだろうと素朴な疑問を感じた(本学教職員)

ギリさんご苦労様でした(本学教職員)

お疲れさまでした。ギリさんも頑張っていて良かったです(本学教職員)

全体として良い(が、音響については事前点検を要するか) (本学教職員)

学生自身が発表する形が良かったです!!平日のこの時間帯で参加できる人が限られるが稚内市内の企業がこういう場に人を送り、共に人づくり、まちづくりを進めるようになりたい。

(一般)

大学が稚内にとってなくてはならない存在であり続けることを願っています。（一般）

地方大学の在り様として大学(教授集団)の知恵をいただくこのことがこの宗谷の地に必要なことと思います。その意味ではこのCOC推進事業の継続に大きな期待をしております。（一般）

地域に根づいた大学に益々発展される事を願います（一般）

研究成果が可視化されまとめられて報告されることを期待しています。（一般）

内容を今以上に深めていくと尚良いと思います。（一般）

## ア ン ケ ー ト

### < お 願 い >

- このアンケートは、COC推進事業の推進と地域活動報告会等の充実を図る目的で、参加者の皆様の感想やご意見をお伺いするものです。
- このアンケート調査の結果は、集計して利用され、個人を特定することはありません。
- このアンケートにより得た情報の管理は、個人情報保護規程等に則り、COC推進委員会が適切に行います。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

稚内北星学園大学

以下、7点お伺いします。該当する番号に○を付け、自由記述に感想をお書きください。

（１）はじめにあなたの学年（学生のみ回答）、世代、所属をお聞きます。（各１つに○）

- ① 学年（学生のみ回答） 1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年 5. 夜間学生  
② 世代 1. 10歳代 2. 20歳代 3. 30歳代 4. 40歳代 5. 50歳代 6. 60歳代以上  
③ 所属 1. 一般参加 2. 学生 3. 本学教職員

→ ③で“1”を選択された方にお聞きます。  
具体的な所属を教えてください。（例：高校教諭）

（２）これまで、本学では地域活動報告会6回、シンポジウム2回を開催しました。何回目のご出席をお聞きます。（1つに○）

1. 5回目及びそれ以上 2. 4回目 3. 3回目 4. 2回目 5. はじめて

（３）地域活動報告会の長さ、開催時間についてお聞きます。（各１つに○）

- ① 地域活動報告会の長さ 1. 長いと思う 2. 適当な長さと思う 3. 短いと思う  
② 地域活動報告会の開催時間 1. 午前中がよい 2. 午後の早い時間がよい 3. 午後の遅い時間がよい  
4. 夜の時間がよい

（４）今日の地域活動報告会を何で知りましたか。（複数回答可）

1. 新聞 2. ホームページ 3. チラシ 4. メール 5. 案内状 6. その他（ ）

（５）地域活動報告会に来てよかったと思いますか。（1つに○）

1. 大変良かった 2. よかった 3. ふつう 4. あまり良くなかった 5. 良くなかった

理由をお聞かせください：

（６）今後、このような地域活動報告会や講演会、シンポジウムで取り扱ってほしい内容や話題（学生、本学教職員は行いたい内容や話題）をお聞かせください。

（７）さいごに、各報告等についてご感想や激励のメッセージをお聞かせください。

報 告 ①：

報 告 ②：

報 告 ③：

全 体：

< ご協力いただきましてありがとうございました >



第7回 船内北國学園大学 COC 事業

# 地域活動報告会

2017年11月21日(木) 14時30分～  
船内北國学園大学 新館 1301 教室  
入場無料(予約不要)

船内北國学園大学「COC」事業の一環として、地域活動報告会を開催します。この報告会では、地域活動に取り組んでいる学生、教職員、地域関係者の発表を聴き、地域活動の現状と今後の展望について話し合います。

～口頭発表～

1. 地域教育推進室  
「数学を学ぶ楽しさと教える楽しさがあるマスフェアの取り組み」  
発表者：渡辺久・石田美穂・中村優樹
2. まちなか振興支援室  
「平成 29 年度まちなか調査実習中間報告  
～船内中央商店街アクションリサーチ・船内市子どもの貧困問題調査～」  
発表者：船内明・岡田大太・梅田健斗・吉野裕平・横山彩沙・藤沢乃由子・佐藤純介・石原幸樹 他4名
3. 地域観光支援室  
「Potential and Enhancement of Cultural Tourism thereby Integrating IoT(Internet of Old Things)」  
発表者：Bishnu Prasad Gauram・Krishna Prasad Chatterjee・Bhagawan Poksha

～ポスター発表～

1. 「運動型学生による地域のスポーツ文化機関に向けた取り組みとその可能性  
～船内北國学園大学カーリング部の歩みを事例に～」 発表者：佐藤雄輔
2. 「京谷地域研究所のプロジェクト」 発表者：斉藤悠太

〇問い合わせ 船内北國学園大学(COC事業推進課) 0662-32-7312 **Go 船内北國学園大学** 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇



問い合わせ先

稚内北星学園大学

COC推進委員会事業推進室（事務局総務課）

〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目2290-28

T E L 0162-32-7511

F A X 0162-32-7500

E-mail info@wakhok.ac.jp

わくほくCOCホームページ

<http://coc.wakhok.ac.jp/>

COC推進委員会第7回地域活動報告会実施報告書編集小委員会 委員一覧

佐賀 孝博（副学長／教授／事業推進責任者）

石橋 豊之（助教／事業推進室長）

高 澍（特任助教／学習コンシェルジュ）

中野 窓香（メディア表現指導員）

## 第7回地域活動報告会実施報告書

2018（平成30）年3月31日発行

**編 集** COC推進委員会第7回地域活動報告会実施報告書編集小委員会

**発 行** 稚内北星学園大学 COC推進委員会  
〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目2290-28  
電 話:0162-32-7511（代表）  
メール:info@wakhok.ac.jp

---

無断転載を禁じます。